

5 肉用鶏農場で実施した衛生指導を中心とした取り組み

鳥取県西部家畜保健衛生所 ○中口真美子 長千恵

1 はじめに

管内に3農場を有する肉用鶏農場で、流行性の鶏疾病が発生したことをきっかけに、衛生対策を中心に農場の改善に取り組んだ。

2 農場概要

農場概要は右の図の通りで、通常の飼養管理は3農場を5名で管理しており、出荷、堆肥出しの時にはさらに2～3人の応援が入る体制だった。これまでも衛生対策をはじめとする指導を行ってきたが、取り組みがなかなか浸透しなかった。そんな中A農場で伝染性喉頭気管炎（ILT）が発生。即座に衛生対策を強化したが、続いて約10日後にB農場でも続発した。疾病は終息したが、この疾病の発生により農場は非常に大きな経済的損失を受けた。大きな痛手を被ったことにより、今までなかなか進まなかった問題点の改善に全力で取り組んだ。

農場	飼養羽数	棟数
A農場	26,000羽規模	2階建てウインドレス鶏舎×2棟 ①約7,300×2フロア ②約5,800×2フロア
B農場	20,000羽規模	2階建てウインドレス鶏舎×2棟 ①約4,600×2フロア ②約4,600×2フロア
C農場	20,000羽規模	2階建てウインドレス鶏舎×1棟 平屋開放鶏舎(1棟)×3フロア ①約5,500×2フロア ②約12,000(3棟合計)

3 問題点と取り組み

対象となった農場は、大きく分けて（1）衛生管理（2）飼養管理（3）現場と経営者との意識の差の3つの問題点が挙げられた。

（1）衛生管理

鶏の飼育は日齢の若い順に農場をまわり、全員で飼養管理に当たっていた。さらに各農場で行き来する場合もあった。それぞれの鶏舎に専用長靴はあったが、一部不足があり、長靴を持ち回っている管理者がいた。また、消毒体制も内容を細かく見ていくと、踏み込み槽や車両消毒などに改善すべき点がいくつもみられた。

衛生管理不足の改善に向けた取り組みとして、共同管理体制を見直し、各農場専用のヤックや長靴を設置した。鶏舎の各入り口で専用長靴への履き替えを誰もが行うこととした。踏込槽は2つに増やし、鶏糞などの有機物を十分に落としてから消毒槽をしっかりと踏むようにした。消毒液の交換もしっかりと行い、アルコールスプレーによる手指の消毒も行

問題点

1. 衛生管理

- 各農場を共同で管理している
- 消毒の不徹底

2. 飼養管理

- 系列の他の農場と比べて死亡数が多い
- 管理者による技術差が大きいなど

3. 現場と経営者の意識の差

- 経営者の指示が現場に的確に伝わっていない
- 農場管理者と経営者の意思疎通

衛生管理への取り組み

- 各農場を共同で管理していた
共同作業前提の意識改革
→専任体制への移行
各鶏舎専用の物品(ヤック、長靴など)
- 消毒の不備があった
→踏み込み槽を二つにし、予洗? 消毒槽
消毒液の交換
消毒槽での長靴の十分な浸漬
手指の消毒の確実な実施
- 消毒用動噴の購入・設置
農場入口及び鶏舎まわりの消石灰散布の徹底
関係者への周知徹底

うようになった。

農場入り口には車両用動噴をあらたに設置し、関係者への消毒の徹底周知も行った。



衛生対策の改善に取り組んだ結果、消毒を初めとする衛生管理の重要性が浸透した。

一つの農場敷地内であっても、鶏舎の中と外をしっかりと区別すべき必要性を認識してもらい、農場間で行き来する体制を改め、各自がしっかりとした衛生対策を行うようになった。

(2) 飼養管理

飼養管理の問題点は、各農場とも死廃率が高く、特に30日齢前後からの死亡が多いこと、鶏舎によって、成績に差が見られること等が挙げられた。これらを改善するために、定期的な病性鑑定、鶏舎温度の測定などを行った。消石灰の散布も随時行うこととした。

死亡鶏の病性鑑定を行うと、主な死因は大腸菌によるもので、調べた検体のほとんどから検出された。大腸菌は早いうちから浸潤し始めており、日齢が進むに従って、ブドウ球菌の検出も増えていく傾向だった。農場で接種されていたワクチン、伝染性気管支炎（IB）、伝染性ファブリキウス嚢病（IBD）、ニューカッスル病（ND）は、抗体検査の結果いずれも良好な状態を保持しており問題はなかった。

次に鶏舎内の温度を測定すると、全期間を通じてマニュアルから離れた温度であることが多く、最高温度と最低温度の差もばらついており、これは鶏へのストレスになっていると思われた。農場では最高と最低気温の記録はなされていたが、日格差があることが管理者によっては十分意識されておらず、管理にあまり反映されていなかったり、今の鶏舎では調節したくても出来ない、といった声が聞かれた。

飼養管理の問題解決への取り組みとして、勉強会を開催し、病性鑑定の結果を活かすこと。鶏舎内の換気など管理方法の問題の検討、情報交換などを行い、管理に反映させた。

2. 飼養管理

- (1) 系列の他の農場と比べて死亡数が多い（特に30日齢以降）
- (2) 管理者による技術の差が大きい
- (3) 各鶏舎の構造に違いがある
- (4) 設備面での不足

飼養管理の問題への取り組み

- (1) 管理者による技術の差が大きい
 - ➡ 外部からのアドバイス
 - 鶏の状態に合わせた飼養管理
- (2) 各鶏舎の構造に違いがある
 - ➡ 各鶏舎での温度や換気の状態を確認
 - 飼育環境に合わせた管理

・・・実態の把握と検討
➡ 勉強会の実施 ➡ 管理に反映

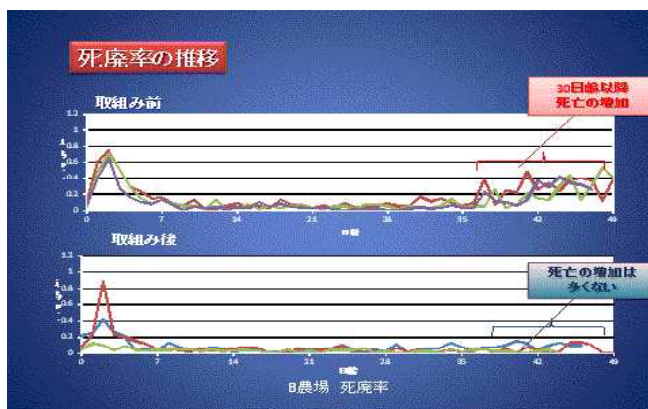
勉強会テーマ

- 第1回
 - ・ 肉用鶏経営者で注意すべき疾病について
 - ・ 農場成績について
 - ・ 薬剤耐性菌について
- 第2回
 - ・ 抗体価について
 - ・ 病性鑑定について
 - ・ 他農場との死鳥数の比較
- 第3回
 - ・ 農場成績について
 - ・ 鶏舎の管理について

勉強会では、まず基本を見直すため、疾病や薬剤耐性菌について理解してもらい、他の農場の成績と比較しながら、自分たちの農場の問題点や参考になる点を話し合った。

次に抗体検査や病性鑑定の結果を踏まえ、換気の重要性を見直し、風の流れや日齢に合わせた管理を見直すようにした。さらに、取り組みを始めてから常にこれまでの成績を検討し、改善された点やこれからの課題を話し合った。特に鶏舎の温度管理や換気の重要性を再度認識してもらい、これからも改善に向けてできる事を話し合った。

勉強会の後、死亡の主な原因となっている大腸菌への対策として、発育不良鶏の早期淘汰や適切な薬剤投与を行った。環境鶏舎環境改善のため外部から鶏舎の換気をチェックしてもらったり、温度設定の確認、換気扇タイマーの導入なども行った。



飼養管理の改善の結果、取り組み前では30日齢あたりから死廃棄率が増えていたが、取り組み後は目立った鶏の死亡の増加は見られなくなった。損耗が減少し、出荷までの間、死廃率は0.2%以下となり、農場成績の向上につなげることができた。

(3) 現場と経営者との意識の差

今回対象となった農場では、経営者は普段県外に常在している。今までも現場への指示が的確に伝わらず、なかなか実践されていないことが多かった。逆に現場からは経営者は実情がわかっていない、という思いが強く不満がくすぶっていた。経営者と現場管理者との意識のずれは大きく、コミュニケーションがうまくとれていなかった。そこで、勉強会には経営者にも参加してもらい、家保職員が間に立って、関係者が一体となって改善に取り組んだ。

3. 現場と経営者との意識の差

- ・ 経営者の指示が現場に的確に伝わっていない (実行されていない)
- ・ 農場管理者の意見が経営者に届かない (現状をわかってもらえない)

現場と経営者との意識の差改善に向けて

- ・ 農場管理者と経営者の意思疎通
 - ➡ 勉強会の開催などに経営者も交えて一緒に問題を検討、改善に取り組む

勉強会には毎回、経営者の参加してもらったため、管理体制をはじめ、鶏舎設備の改善などの問題の解決の進展が早くなった。また、双方の意向を確認する機会が増え、意

思疎通が以前よりははかれるようになった。

3 まとめ

今回、疾病の発生を機に衛生管理を中心に農場の改善に取り組んだ。取り組みを始めた後、今までなかなか進まなかったしっかりとした衛生管理の実施、および飼養管理上の問題や、現場と経営者の意識の差の改善がはかられた。その結果、死廃率の減少や、農場成績にも改善がみられ、収益性も良くなっている。

旧来の体制や人の意識を変えるのは大変だが、疾病の発生を農場を変えるよい機会に出来た。今回の取り組みにおいて、関係者が一体となって努力し続けていく必要性が非常に大切であると感じた。今後も引き続いて改善に努めたい。